



A・F・Tジャーナル

文部科学省認可(社)全国服飾教育者連合会(A・F・T)
東京事務所 〒100-0011 東京都千代田区内幸町1-1-1 帝国ホテルタワー7F

ホームページ www.aft.or.jp



大阪事務所 〒530-0001 大阪市北区梅田2-2-2 ヒルトンプラザウエストオフィスタワー16F

ニューヨーク事務所 ニューヨーク市マジソン街295番42F

vol. **31** Summer
2006

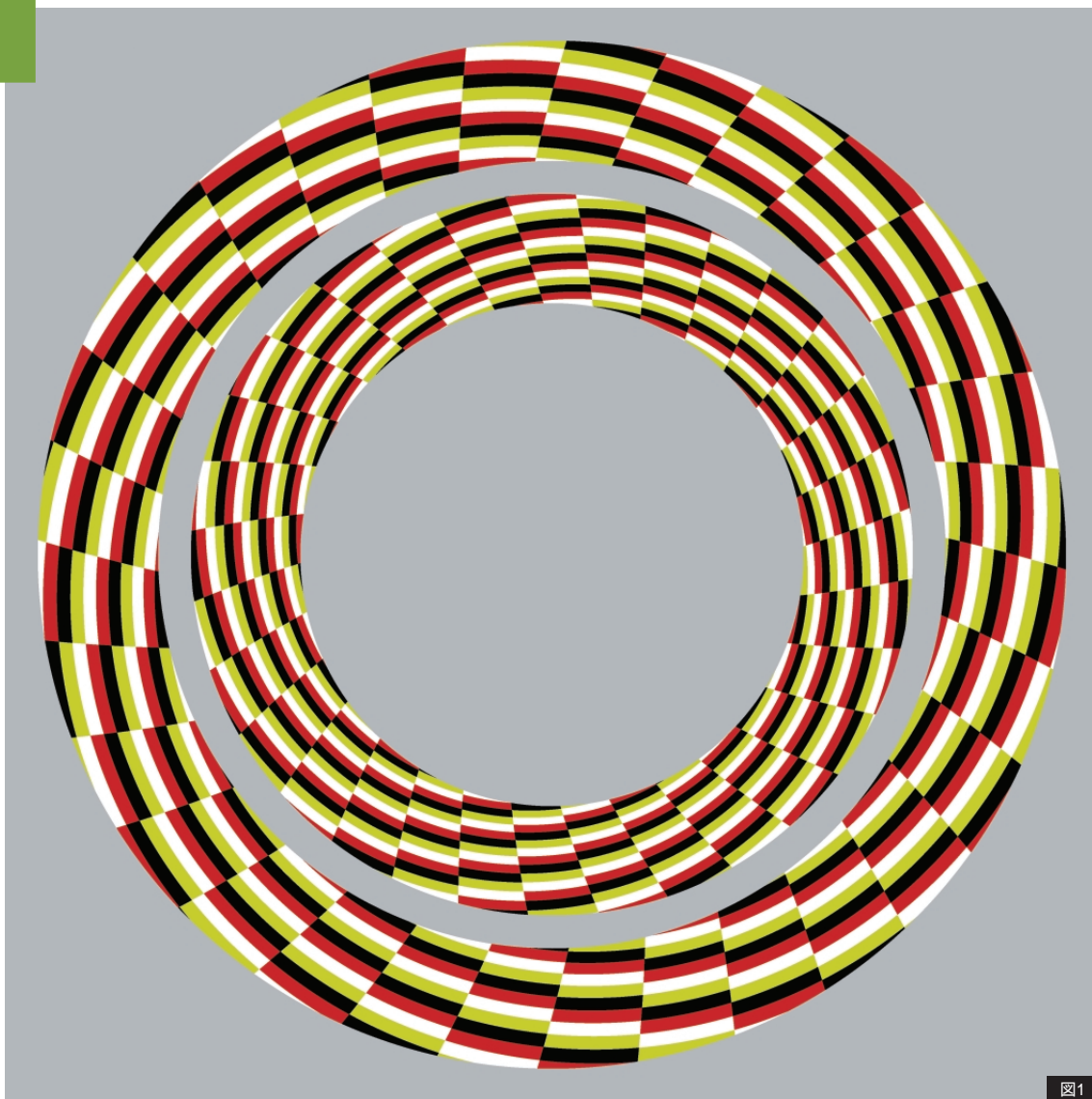


図1

色が強くなる 錯視

一石二鳥という四字熟語がある。ひとつの行為で二つの利益を得ることを言う。図1に示した錯視デザイン(2つの環)(©Akioyoshi Kitaka 2005)は、さしずめ一石二鳥のデザインである。

このデザインには、静止画が動いて見える錯視が二種類ある。一つは、何もなくても動いて見える錯視で、図を眺めているだけで内側のリングは収縮して(あるいは遠ざかって)見え、外側のリングは拡大して(あるいは近づいて)見える。この錯視を最適化型フレーザー・ウィルコックス錯視と私は呼んでいる。もうひとつは、図の中心を見つめながら図に目を近づけたり遠ざけたりした時に、二つのリングが互いに反対方向に回転して見える錯視である。この錯視を私は回転型オオウチ錯視と呼んでいる。

ところがこの図はただの一石二鳥の錯視デザインではない。一石三鳥なのである。三番目の錯視は、色が強くなる錯視である。二番目の動きの錯視と同様、図の中心を見つめながら図に目を近づけたり遠ざけたりした時に起こる。図に目を近づけると、内側のリングの赤みが増し、反対に図から遠ざかるときは外側のリングの赤みが増して見える。

この色の錯視は、私は新しい錯視と考えている。その説明であるが長波長の色(赤)の脳内処理速度が短波長の色(青)よりも速いと仮定すれば、この現象を困難なく説明できると考えている。図2はこの説明の概念図を示した。左から黒赤白黄のパターンが左に動いた時、処理速度の差のため白部分の前後に赤と青がそれぞれはみ出すが、はみ出た赤は矢印の先のようにそのま

ま赤として残り、つまり赤が増えるが、はみ出た青は後方の黄と打ち消しあうて破線矢印の先のように無彩色に近くなる。

赤が青よりも速く処理される、という考え方は踊るハート(図3)・暗い照明下において、青地に赤のハートを周辺視野で動かして見るとハートが踊って見えるという錯視の説明にちがつと登場するのであるが踊るハートには他の説明の方が有力である。ということは、脳内処理速度説のデモンストラーションとして色が強くなる錯視がふさわしいということになれば、図1は一石四鳥なデザインということになる。

北岡 明佳
立命館大学 / 文学部教授(知覚心理学)

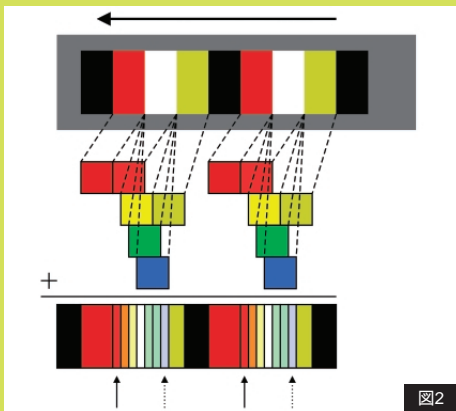


図2



図3